

飛鳥井家歌学とその継承

日高, 愛子

<https://doi.org/10.15017/1654590>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



氏 名	日高 愛子			
論 文 名	飛鳥井家歌学とその継承			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	辛島 正雄
	副 査	九州大学	教授	高山 倫明
	副 査	九州大学	准教授	川平 敏文
	副 査	九州大学	教授	佐伯 弘次

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、鎌倉時代初期に藤原雅経（1170－1221）によって興された歌道と蹴鞠道の名門である飛鳥井家の歌学について、室町時代の飛鳥井雅親（1417－1490）以降、幕末の飛鳥井雅典（1825－1883）までを対象に研究したものである。

第一部「古今伝受の形成と享受」では、飛鳥井家における歌道伝受の具体相を明らかにするため、飛鳥井雅俊（雅親男。1462－1523）による大内義興（1477－1528）あての奥書をもつ資料を調査・分析するとともに、雅親の講釈に基づくとされる『古今栄雅抄』の内容について詳細な検討を加えている。前者については、従来から存在の報告されていた東北大学狩野文庫蔵『古今秘決』のほか、徳島県立図書館山口文庫蔵『古今和歌集伝授』を紹介し、飛鳥井雅康（雅親弟。1436－1509）の奥書をもつ「飛鳥井流切紙口伝」の諸本についても内容を検討したうえで、当時行われていた宗祇流の口伝等とも重なりあいながら、飛鳥井家独自の秘伝が形成される様相を、資料に基づいて明らかにしている。後者については、いったんは焼失した『古今栄雅抄』が復原・再編されるさいに、一条兼良（1402－1481）の説が積極的に取り込まれていることをつづさに指摘するとともに、そこには、兼良の息良鎮から指南を受けたらしい再編者の、二条家流といった旧来の歌道家の説に縛られない編纂姿勢が窺え、それがこの書の汎用性を高めたとする。

第二部「歌道の継承をめぐる」では、まず、飛鳥井家の庶流に甘んじざるをえなかった雅康の、歌道と蹴鞠道とにかけける晩年の心情を、多数詠まれた定数歌をとおして浮き彫りにする。ついで、江戸時代に入り、後水尾院歌壇において存在感を示した飛鳥井雅章（1611－1679）の活動を新資料に基づき紹介するいっぽう、雅章の没後、飛鳥井家を継ぐこととなった四男雅豊（1664－1712）が、父の死後わずか二カ月の間に著した歌学書『和歌樵談』を取り上げ、種々の引用からなるこの書に込めた雅豊の、歌道家当主たらしとする覚悟を読み解く。そして、歴代天皇の歌道師範を務めた飛鳥井家の最後の当主であった雅典について、孝明天皇の崩御（1866）のため古今伝受がかなわなかったことにより、御所伝受の伝統そのものが途絶え、さらには明治 11 年に雅典宅にあった古今伝受関係の文書が時の政府により調査されたさい、報告書に「総て重要な歌道の秘事にあらず」として無価値なものとされたことで、その伝統が完全に断絶したことを指摘する。

本論文は、室町後期から幕末・明治維新まで、時代の荒波に揉まれながら、歌道宗家としての飛鳥井家が、武家や皇族ともかかわりつつ、その時どきをいかに生き抜いていったか、種々の新資料を駆使しながら明らかにする。飛鳥井家は、同じく歌道宗家である冷泉家のようにまとまった資料が残っていないため、従来その実態についての解明はあまり進んでいなかった。それゆえ、資料編をも備える本論文の成果は、きわめて貴重である。

以上のように、本論文は、飛鳥井家の歌学と家の継承ということについて、実証的かつ広い視野で、従来未調査であった資料を渉猟しつつ明らかにした、たいへんな労作と評することができ、今後の中世・近世歌壇史研究の進展にも大きく寄与するものである。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。